



説教要旨「あべこべな裁判」

ルカによる福音書 22章 63～71節

捕らえられたイエス様は、大祭司の家へと連れて行かれました。夜が明ければ、ユダヤ人の最高法院が招集されて裁判が行われます。裁判と言っても判決はすでに決まっています。イエスを殺すという結論ありきの裁判です。

この時代、何人かのメシア僭称者がイスラエルの独立を掲げてローマ帝国へ反旗を翻しました。そのため「メシア」を名乗る者をローマ帝国への反逆者と見なされたのです。最高法院の人々はイエス様をローマへ訴えるための言質をとるために問いただします。「お前がメシアなら、そう言うがよい」(67節)「では、お前は神の子か」(70節)と。彼らはただ、イエス様を有罪にするための材料を得ようとしているだけです。この方が救い主なら、従って救いを得ようなどとはこれっぽっちも思っていない。彼らはメシアを、神の救いを求めてはいないのです。

10年前、東日本大震災によって引き起こされた悲惨な現実の中で、私たちもまた、彼らと同じようにイエス様を、そして神様を尋問してはいなかったでしょうか。『本当に神様が私たちを愛しておられるのならば、どうしてこのような悲惨な状況から救い出してくれないのか』と。しかし、その問いの根底には、イエス様を侮辱し暴行を加えた見張りの者たちや、最高法院の人々の問いと同じ『結局なにも出来ないだろう』とあざ笑う思いがあるのではないのでしょうか。苦難に直面した時、神を裁こうとする私たちの姿が、この見張りをしてきた者たちとして、最高法院の人々としてここに映し出されているのです。

そのような私たちの裁きの下で、イエス様は侮辱を受け、暴行され、そして十字架につけられて殺されていくのです。しかし、そのイエス様の苦しみと死によって、私たちに救いが、罪の赦しを与えられます。ローマ帝国の最も過酷な刑罰である十字架刑が敗北ではなく勝利の印となる。そういう逆転が起こります。惨めに、あざけられ、ののしられ、裁かれているこのイエス様が、死にて葬られた後、天に挙げられ、全能の神の右に座られる時がくるのです。

(2021・3・7 説教者：稲垣真実)